

## 佳作 心友

沖縄県 沖縄県立豊見城高等学校一年 宮城 佑菜

「ゆうな、風邪大丈夫？ずっと心配してたわけよ、治ったかなってずっと気になってて…」

久々に聞く電話越しの声に、私の頬が緩みました。笑っちゃうくらいに心配してくれる電話の相手は、今では私の心の支えとなっている友達です。小学校三年生からずっと同じクラスでずっと一緒にいた彼女と、中学校卒業と共に別々の高校に進学するのは、不安や寂しさがありました。私の中の彼女の存在の大きさに気付くきっかけになりました。

特別支援学級に通っていた彼女の隣には常に先生がいたのですが、たまに一人になって困っている時に声をかけたことで仲良くなりました。雑巾の使い方が分からなかった彼女に、絞り方や拭き方を教えたり、嫌いな食べ物に給食に出てきた時は、

「一緒に一口だけ食べてみよう。」

と声をかけたりして、彼女のできることがどんどん増えていくことに喜びと楽しさを感じていました。しかし、

付くことができました。

私は元々人見知りで、自分から人に声をかけるのが苦手だったけど、思い返せば私の隣にはいつも彼女がいて、彼女を通してたくさんの先生、友達と出会い、将来児童指導員になりたいという夢を見つけることもできました。

高校生になった今では、毎日会うことはできないけれど、私は彼女の悩みを聞き励ましながら、彼女は私に笑顔と元気をくれて、一緒に頑張ろうという気持ちになれています。これから別々の道に進んだとしても、お互いに心の支えとして、ずっとずっと心友でいたいのです。

ある日、当たり前のように一緒に掃除をしている時、いつもと同じなのになぜかその日だけイライラして、彼女に強く当たってしまいました。

「なんで何回も教えてるのにできないの。なんでずっと見てるだけなの。なんでありがどうも言えないの。」言いながら心の中では言いすぎていると分かっていたのに、泣いている彼女を前に止めることができませんでした。家に帰って母に話したところ、

「怒るぐらいならやらない方がいい。ありがどうをもらうためにサポートしてるの？友達だからやってるんじゃないの？」

と言われ、はっとしました。確かに、誰かに頼まれたわけでもなくただ自主的に行動していただけに、友達に怒りをぶつけてしまったことにとでも後悔しました。彼女と友達じゃなくなるのが嫌だったので、その日を境に「サポーター」ではなく「友達」として彼女と接するようになりました。すると、心が軽くなり、他愛もない話で笑い合える仲になりました。

中学生になると、私と彼女の関係は大きく変化してきました。私が元気がない時は、

「大丈夫？」

と顔をのぞきこんできたり、笑顔にさせようと私のために絵を描いたり、私の話を聞いてくれるようになりました。この時私と彼女はお互いに支え合っていたんだと気が